

八木隆一郎

わが母は聖母なりき

八木隆一郎

わが母は聖母なりき



秋田書店

昭和44年 5月30日 初版発行

わが母は聖母なりき

¥ 390

著 者	© 1969	や ぎ りゅう いち ろう 八 木 隆 一 郎
発 行 者		秋 田 貞 夫
印 刷 所		株式会社 堀内印刷所

発行所 株式会社 秋 田 書 店

郵便番号 101

東京都千代田区三崎町三丁目10番8号

振替 東京 99353 電話 (261) 5151~5

乱丁、落丁がありましたら、本社でお取り替えいたします。

はじめに

このところ一寸した八木ブームである。生前書きのこした^な句わしい戯曲が一冊の本になって出版され、第二の故郷である青森県五所川原市に追慕碑が建てられ、友人達の追想文集が土梓され、その中に所載された三十年前の随筆「わが母は聖母なりき」がテレビドラマになって、二十七回連続放映され、かつてその随筆を載せた婦人公論が、いま一度それを再載し、その上今度は秋田書店によって八木作品集が編まれることになった。映画化も舞台化も企画されている。八木の生前に一度もなかったブームが押し寄せている。八木が生きていたらさぞ酔っぱらって奥方を悩ませたことだろう。どうしてあんないい奴があんなに早く死んでしまったのか、何度かかんがえても口惜しくてならない。

八木の作品をはじめて観たのは、亡き井上正夫が演った「熊の唄」だったと思う。ちょうどその時分わたしも井上さんになにか書けと言われて「華やかな夜景」というのを書いた。そうしたら、今度は八木が「焰の人」を書いた。で、わたしがなにくそと「閣下」を書いたら、おっかぶせて八木が「海の星」を書いた、のではなかったかな。三十年前の話だからまちがっているかもしれないが、とにかくそうして二人は互にエキサイトされながら仲良く生長して来た。もっとも

その背後には、井上さんと蜂野マネジャーの絶えざる鞭撻があったということを忘れてはならない。つぎつぎと作品が脚光を浴びたということ、その恵まれた環境が二人の作家をほんものの作家に育ててくれたのだと思う。井上さん達は若い作家の仕事を無為に終らせなかった。出来上る都度ディスカッションをして、上演不可能の場合にも、その失敗が次の仕事にプラスされるように配慮してくれた。そのあたたかい庇護がどれだけ若い二人を感動させ、芝居を書くことへの情熱を掻き立ててくれたか。当時は副業としてラジオドラマがあるだけで、今日以上に作家の苦しい時だった。八木は才能を買われて、映画のシナリオを書かされていたが、会うと、いい芝居が書きたいといつも言っていた。

戦争というものがあって、八木は十年ばかり仕事の上で停滞を持ったようだ。劇壇の情勢が変わり、井上さんのような庇護者もなくなり、八木は嵐の中へ放り出されたようなかたちになった。その孤独を町裏の酒に紛らせていた。ながい放浪生活をはじめたのもそのためだったろう。八木の気持はおなじ立場にあったわたしには疼くようにわかった。

その頃のある年、わたしが京都の南座で舞台稽古をしていると、久しく消息を絶っていた八木がフタリと現われて、いい仕事が出来てよかったなあと祝福してくれた。こういうところが八木のうれしいところなのだ。逆境の底に在りながら、ちっとも感情めいたものも見せず、終りまで稽古を見ていてくれた。終ってから近くの家で久し振りの盃を上げながら、忠告めいた言葉を口

にしたたら、おれもいまそう思っていたところだ、東京に帰って芝居の仕事を始める、女房や娘をよろこばしてやると言ってくれた。

が、劇壇に戻ってからの八木の仕事は、期待したほど良くなかった。それは八木の稟質が低下したことではない。あまりにも芝居の制作が機械的になっていたからだ。その歯車に八木は捲きついて行けなかったのだ。筆の早い、器用な作家だけが寵遇される劇壇に身を処して行けなかったのだ。縮切に迫られてうんうん苦しみ、不満の多い作品のままに初日を明け、その不評に鬱々とする八木をわたしはしばしば見た。またのみ屋歩きがよみ返った。そして、そのながい沈湎からそろそろ醒めてくれる頃だろうと思っていた時、忽如として急死してしまった。

八木は世に破れたのだと思う。もし良き時代と良き庇護者に恵まれていたら、八木はまだまだ良き作品を書きつづけたにちがいない。

八木の裡には、ひき出せばいくらでもひき出せる高貴な蚕の糸が蔵されていたのだ。それをひき出すことなく、あたら名宝を失ってしまった劇壇の事情をわたしは憤る。八木の死はわれわれだけの悲しみじゃなく、日本演劇文化のじつに大きな不幸であったことを省みるべきだろう。

北 條 秀 司

昭和四十四年四月

目次

はじめに

北條秀司

1

わが母は聖母なりき

9

出奔

31

陽のあたっている障子

36

暗い建物の中で

46

冬窓記

64

母の絵本

75

鷗の子

121

ハルビンより友への手紙

166

おかしな郷愁

194

海と母

200

詩抄

206

母恋いの人・八木隆一郎

229

古川良範

八木隆一郎年譜

244

カバ―装幀
扉絵・カット
中沢 潮
スチール写真
関西テレビ
提供

わが母は聖母なりき

わが母は聖母なりき

一

私の母の名は小栗ふみといった。

父、八木財吉は、村の貧しい男たちの例に洩れず、百姓仕事をする傍ら、夏から秋にかけてカムチャッカへ出稼ぎしたり、冬は町の製材所の人夫をしたりしていた。

私が生れてから四年目に、母は離縁されて、三里隔った村へ帰った。一人息子の私は、勿論父の傍に残された。

煤けた薄暗い家であった。母を失った幼い私は、はなはだ不機嫌な子供だった。

塩を買って来い、と言いつけられて、三四町ほど離れた村一番の繁華な通りまで行った時であるという。

「坊！」



私は、背後から頭越しに、なつかしい母の声を聞いたのだ。

母は風呂敷包を持っていた。

「坊！一緒に行くべ！お母ちゃと一緒に遠い処き行くべ！」

母はやにわに私を抱きかかえ、なんぼ逢いたかったべ、とはげしく頬ずりしながら小走りに長い橋を渡った。秋田県能代町の横をゆったりと流れている能代川の、長い木橋である。

母は私を盗み出したのだ。夜の明けぬうちから家の周りをうろついていたが、やっと私を抱けたのだ。私と離れている辛さに耐えかねた母は、どうしたなら私と一緒に暮せるかと思案したあげく、いっそ北海道へ出奔しゅつぽんしてしまおうと覚悟してやって来たのである。

村の人たちは当時、北海道を「松前まつまへ」と呼んでいた。出稼いせぎに行く男たちも一応は水盃みづさかずきを交して出かけたほど、「遠いところだ」と思われていた。

その日の午後、私たちはもう汽車の中にいた。母は風呂敷包の中の、着物と帯を能代町の質屋で金に代えたのだ。

函館までの切符を買ってしまうと、一円六十銭しか残らなかった。この二円足らずの金が、未知の、荒っぽい松前へ渡る全財産であった。

私は今でもありありと記憶している。

汽車の窓から土堤が見えた。青々とした草の間に、おなじみ深い蒲公英たんぽぽの黄色い花が、点々と

輝くように咲いていた。捨ててきた家のぐるりも蒲公英の花盛りだった。

「家さ帰る」と私は泣きじゃくりながらだだをこねた。すると母も激しく泣き出した。

やがて母は乳房を出して、

「どら、乳のましてける。久し振りだべ？ うめえど！」

といった。母は笑い顔だったが、乳房の上へ涙が流れた。私はすこし恥しい気もちで、だまっ
てその豊かな乳房へかぶりついた。

こうして私たちはやがて北海道の人となった。明治四十二年、母の二十四歳の春であった。

二

函館の町はずれで、母は部屋を借りた。

大きな土管がごろごろしている、汚ない町の、緒^かちやけた三疊間が、私たちの巣となったのだ。
もうここまでは追手も来ない。

下の宿の内儀^{かみ}さんの手引きで、母は野菜の売子になった。青物を一杯積み上げた籠を天秤^{てんびん}で担^に
って、「坊、待ってろ、うめえもん買ってくるぞ！」と母は威勢よく出かけた。しかしその日は、

触れ声が恥しさのために蚊の鳴声のようだったから、お土産などは勿論なかった。

母はやがて、「よいとまけ」の仲間入りをした。一日中私は日向ひなたにいて、母たちが地響きさせて杭を打ち込む唄声を聴いていた。

母の職業は転々と変った。

鰺漁場の飯炊きになった。私はそこで海を満喫した。小金を握って再び函館へ帰ると、今度は波止場の舁人足はしかを相手に、大福餅売りとなった。

一休みの時間になると、塩鱈くさい人足たちが群った。そして冗談をいいながら、母の頬つぺたを撫でたりした。そんな時には、

「バカー！」

私は、懸命になって、赤くいきんで、怒鳴った。

港に向いて、幾つも倉庫が並んでいた。その腹には白ペンキで店の屋号が記されてある。仮名文字だけ読める母は、商いのひまに私へ片仮名を教えた。

「見ろ、あれアサの字だど、あれはクの字」

と片仮名の商標だけを拾って指さすのである。ここだけではない、宿への行き帰りにも、町の看板の片仮名は、どれも教材となった。母にはこれが精一杯の教育だったのだ。母は小学校へたった十日しか通わなかった。あとは子守りにやられたのである。

私は、鷗の糞だらけの倉庫の壁と、田舎者にはけばけばしすぎる町の看板とによって、まず片仮名の読み書きを教えられたのである。

瞬く間に月日が過ぎた。郷里から逃れてきた年だったか、その翌年だったか、私の記憶には全然ないのだが、なんでも冬ちかい寒い夜であったという。母の一生涯の大きな転機となった事件が起きた。

小さな商いの売上げ利益だけでは、母子二人が辛うじて食べてゆけるだけもなかった。母は、夜になると米を一升、時には五合ずつ買いに行った。

その夜も、母は私を背負って出かけたのだ。風呂敷に一升の米を包んで、暗い波止場近くの路を帰った。

すると、どうしたはずみか、風呂敷包みの結び目がほどけたのだ。米はさらさらと、馬糞と魚くさい埃のうず高い敷石の上にこぼれた。

驚いて母は米粒をすくい上げた。べったりと膝について、掌の上の米を吹いた。

昼の喧騒さにひきかえて、夜は森閑とした通りだった。母は米を拾い集めているうちに今更のように、生活に絶望を感じてしまったのである。

背中にくくりつけた私が、この晩は背骨に耐えるほど重たかった、と母は後年幾度述懐したことだろう。

母は、米を拾うことをやめて、薄暗い倉庫の蔭までふらふらと歩いていった。聞きなれた波の、だぶんだふんと石畳みに打ちつける音が、ふいに、死んでしまおうという気を起させた。

「死のか？ 坊……」

と背中の私をゆすり上げた。

私は、子供心にも「死ぬ」ということがなにかしら怖かったに違いない。

「嫌だじゃ、嫌だじゃ！」

と答えたという。

私の、この無心な返事が、ふとしたはずみで生きる氣力を失いかけた母を、激しく鞭打ったのだ。

生きてゆく！ 子供のために生きてゆく！

母は駈け戻った。馬糞と埃こぼぐるみ、米を掬い取った。

「坊！ お母ちゃは死なねえど！ 死なねえど！」

と母は肩越しに手を伸して、私の頭をがりがり掴んで叫んだという。

なんと、いう残念なことであろう。私にはこの晩の記憶がないのだ。

孤独で無一文の「若い母親」が、生活の重圧に押しつぶされたあげくに、捨身になって生きてゆこうと悲痛な覚悟をきめたこの夜の記憶が、遺憾ながらその子の私には全く空白なのだ。